利休の死

内容

利休が自害させられたこの事件は謎が多く、作家たちの創作意欲を燃やしたようで、戦後だけでも井上靖の「利休の死」（1951）, 今東光の「お吟さま」（1957）, 野上弥生子の「秀吉と利休」（1964）, 三浦維新の「千利休とその妻たち」（1980）, さらに、井上靖の「本覚坊道開」（1981）と、いくつかの伝記が書かれています。ことに井上靖（1907-1991）の場合、著作目録を見ると40代で小説を書き始めてもうから、83歳で亡くなる数年間で、闘争的に利休に関する小説や随筆を12篇発表し、利休が死を賜った理由、秀吉に抗弁しなかった理由、利休にとっての死の意味を40年近くにわたって考え続けました。

この際、井上靖が何を考えていたかをまとめ、お話しさせていただきます。

講演者

井上 修一（井上靖記念文化財団理事長）

1940年京都生まれ。ドイツ文学を学び、京都大学文学部卒。同年大学院博士課程中退。ボン大学留学。一橋大学教授。ウィーン大学教授。ウィーン大学大学院教授。現、ウィーン大学名誉教授。井上靖記念文化財団理事長。

日時

平成27年10月17日（土）13:00～14:30

会場

聖徳大学10号館14階

定員

100名（事前申込不要）

後援

松戸市教育委員会

お問い合わせ　響丸

聖徳大学言語文化研究所（知財戦略課）
〒271-8555　千葉県松戸市岩瀬550
電話：047-365-1111（大代表）
http://www.seitoku.ac.jp/chizai/